

日本漢方協会通信

2019 (令和元年) 年11月

飯島弘名誉会長を偲ぶ お世話になりました。

当協会の名誉会長でもあり、監事の仕事をしていた飯島弘先生は、9月29日にお亡くなりになりました。お通夜は10月5日・告別式は6日に町屋葬祭場で行われました。漢方薬・中医学・薬剤師会(足立区薬剤師会会長)・防犯協会(足立区千住防犯協会会長)・将棋関係(日本棋院足立支部長)と幅広く活躍し、叙勲もされています。

1937年にお生まれになり、東京薬科大学の8回生で、漢方関係では、名だたる方々がいらした学年でした。

先生のお父様は、日本漢方協会設立者のお一人で、協会のためにご尽力いただいていた。平成12年から平成27年に渡る15年間、会長をなさっていただきました。

日中友好新聞の平成20年11月15日に「日本漢方の歴史と由来」と題した先生のインタビュー記事がありましたのでここに一部を掲載いたします。日本漢方と中医学の違いは大きい

昨今のわが国にあって、日本漢方と中医学(中国伝統医学)には多くの相違点があります。近年一つの潮流となっている中医学と明治以降に復興した日本漢方の成立や考え方の違いは大きく、しっかりと認識していただきたいと思います。

古代にあっては、わが国の医学は、民間療法的なものを除けば、そのほとんどが中国医学の模倣であったといっても過言ではありません。

6世紀の前半に仏教が朝鮮半島を経由してわが国に伝来しましたが、これに伴って中国の医学ももたらされたといわれています。その後、遣隋使・遣唐使によって大陸の文化とともに医薬品、医学の体系が直輸入されたのです。

この流れは日本で長く続き、幕末まで医学といえば中国から輸入した医学をわが国の国情に合わせて改良した漢方医学でした。

ところが、現在の日本化された日本漢方が普及するようになったのは、桃山時代の曲直瀬道三(まなせどうさん)、玄朔(げんさく)父子の功績が大であります。

1600年ころを境に日本の医学文化の様相は一変しました。

中国から新時代の医書が次々と渡来し、その中国医学書を分かりやすく整理して、上述の曲直瀬道三が「啓迪集」を編述し、時の正親町(おうぎまち)天皇に献上しました。

足利学校で学んだ道三は、明に留学した田代三喜に師事し、中国の金(1115年~)、元(1271年~)医学に自己の経験を加えて独自の医学を作りました。

なんと、正倉院に伝わる聖武天皇の遺品、蘭奢待(らんじゃたい)を信長よりいただいたという当時



の最高地位の医家となったのです。

漢方薬大ファンの徳川家康もこの香木に執着し、それが現在名古屋の徳川美術館に所蔵されています。

道三流医学は現在まで受け継がれ、後世派流医学と呼ばれています。

一方、江戸中期の復古思想とともに医

の原典に帰ろうとする運動が起こり、五行説などを排し、親試実験にもとづくキリスト教といえば聖書のごとく、漢方は傷寒論を聖書(バイブル)としてあがむべきとする一派(古方派)が興り、さらにはそれぞれの療法の長所を取り入れる折衷派などが名乗りを上げ、今日に受け継がれています。

漢方の日中交流を盛んに

以来、東洋医学、漢方治療が大きく普及。いまでは、全国の薬局5万店のうち1万店に広がっています。

現在、中国との漢方交流は盛んになっており、今後も広がることは間違いありません。平和で友好な関係を大切にして、お互いの健康増進に漢方医学を役立てていきたいですね。

会長をお辞めになったときの文を載せます

「深奥幽玄」ノーベル賞作家、川端康成氏の揮毫書が東京市ヶ谷の日本棋院に飾られてあります。奥深く趣のあること計り知れずと囲碁の世界を象徴したことばです。私も父の影響で幼い頃より囲碁に興じておりました。

さて退任に及び、漢方の世界を俯瞰する時、まさに漢方は「深奥幽玄」の世界そのものであります。歩き出したときから、歩ける限り楽しめる学問、それが漢方なのです。

漢方の知識が増えれば増えるだけ、知識が深まればその深さの度合いの分だけ、究めつつ楽しめる至宝の宝物、これが漢方なのです。

漢方協会の会長職を15年務め、同好の志と歩き続けてこられたことを心より感謝申し上げます。

今後の漢方協会(協会は不滅です)の健全なる発展と関係者並びに先生方のご健勝ご活躍を懐心より祈念申し上げます。

これから漢方を学ぼうとする方々へ

漢方を知る者はこれを好きな者に如かず

これを好む者はこれを楽しむ者に如かず 孔子曰く
一緒に楽しみましょう

先生ありがとうございました 三上